



あっせい てんかもち 圧政と「天下餅」

院長 西田 敬

何事につけ筋道を明確にしなけりや気が済まぬのが日本人気質か。戯唄にもある、「織田が捏ね、羽柴が搗きし天下餅、座りし儘に喰うは徳川」戦国時代を揶揄した文句。戦に次ぐ戦、当然、圧政に苦しんで疲弊して居た民・百姓から出た呻き声だもの、誰しもピンと来る。西洋世界は斯かる些細な事には拘らぬ。譬えば卵巣癌、数多ある癌腫の中でも一大勢力は腺癌。但し、素となる可き外分泌腺なんぞ、卵巣の組織中には、葉にしたくも、見当たらぬ。知恵を絞ったのがWHO。気に為ったと見え、卵巣腫瘍の分類に手を染めた1973年に此のグループには、今でも和訳に難渋する、common epithelial tumoursなるcaption (見出し) を付けた。その後、surface epithelial stromal tumours (表層上皮性間質性腫瘍) と出自に忠実な題目に変更したが、煙の無い処に炎を立てたような後ろめたい気分は拭えない。昨年発刊された最新のWHO分類では物議を醸したこのcaptionを丸ごと放逐してしまった。扱、こうなると卵巣の腺癌は何処からきた？腹膜表面に

出抜けに腺癌を掴み出して見せたのと一般で、手品のタネ、由来探しが始まった。辺りを見渡せば卵管から子宮へ連なる生殖管。卵管液 (hTF: 受精卵の培養液) や内膜腺分泌液 (通称: uterine milk) など胚子 (受精卵) に器官形成期の重要で、且つ必須の栄養源 (histiotrophic nutrition) を産生分泌する外分泌腺には事欠かぬ。では、卵巣腺癌のルーツは那邊にありや？容疑者の筆頭は卵管癌。彼奴は直径2 mm程度と病巣は虫眼鏡サイズで、卵管采の粘膜襞に身を潜め、通常は見逃すが、忽ち、大網に転移病巣を造る悪辣さ。先頃 (2012年)、英国で卵巣癌の治癒率を臨床進行期 (stage) は考慮せずに算出していたが、何と60%以上は治癒困難。罹患-致死率 (incidence-death ratio) が悪過ぎる。癌と敢えて戦わずして、身を躲すAngelina戦略も宣為るかな。待て、暫し、成程乳癌は乳腺を除去すれば癌の芽は摘取れるが、卵巣癌では如何哉？

卵巣の表層上皮つまり腹膜 (mesothelium) が腺癌 (上皮性悪性腫瘍) に化ける筋立てには先人の労苦が偲ばれるが、傑作はLauchlan ACのsecondary müllerian systemであろう。卵管や子宮の原基であるミュラー氏管の形成には将来的には腹膜に為る体腔上皮 (coelomic epithelium) の嵌入が必要。然すれば腹膜とミュラー氏管は近縁関係、いや寧ろ双生児。然らばsecondary müllerian systemなんぞあ腹膜上に散らばる。卵巣癌を避ける為のリスク低減手術も卵管切除では不十分でかなり広範な骨盤腹膜切除を要する事になるが果たしてそうか？

